渋沢栄一物語

Shibusawa Eiichi History

【特別編②】

東北六県と栄一

東北六県は、戊辰戦争で敗れ、「白河以北一山百文」と言われたように、薩長藩閥政府の下、苦難の道を歩むことになります。栄一はこうした東北地方に対して深い同情を寄せ、同地方の振興についても、早くから志すものがありました。

栄一が頭取を務める第一国立銀行では、明治十一年から翌年にかけて、盛岡・宮城・石巻と各支店を開設し、その後さらに秋田・福島にも支店を増設しました。

明治二十年代に入ると、栄一は地方銀行の自立を促すため、自ら進んでこれらの支店を廃止し、その任を地方銀行に譲りました。

ちなみに第五十九国立銀行の設立に際しては、津軽藩家老大道寺繁禎が銀行経営について教えを請うべく上京。仙台平の袴に羽二重の紋付羽織を着して栄一に面会しました。これを見た栄一は、従来の格式や風習にとらわれず、親切・丁寧に人に接することの大切さを説き、同藩の若者を上京させ、栄一指導の下、銀行業務を学ばせることを提案しました。

▲旧第五十九国立銀行本店は、明治37年に建設。現在重要文化財に指定されている

青森銀行（旧第五十九国立銀行）や七十七銀行（旧第七十七国立銀行）が今日あるのは、こうした栄一の卓越した指導力の賜物といえます。

大正二年、栄一を会頭に、益田孝や大倉喜八郎ら実業人が集い、東北六県の産業振興と福利増進を目的に「東北振興会」が発足します。たまたまこの年、東北地方は大凶作に見舞われ、翌年一月には鹿児島の桜島が大噴火し、どちらも被害が甚大であったため、栄一は政府要人と相談し「東北九州災害救済会」を設立、副総裁となり義援金の募集に奔走しました。

大正六年、栄一は十八日間にわたり東北地方を巡回。各地で大歓迎を受け、二十か所で演説を試み、東北人の一層の奮起を促しています。（文：新井慎一）

物語の手引き

『戊辰戦争』（1868～1869年）

薩摩、長州を中核とする新政府軍と旧幕府勢力および奥羽越列藩が戦った戦争です。勝利した新政府軍は、これ以降日本を統治する政府として国際的に認められ、逆に、敗れた東北列藩は、「朝敵」として厳しい処分を受けました。

「戊辰」は戦争の勃発した1868年（慶応4年／明治元年）の干支に由来します。

益田孝と大倉喜八郎

共に新潟県の出身で、明治～大正期の大実業家です。益田は三井物産を、大倉は大倉組を設立し、栄一と組んで草創期の日本経済を動かし、さまざまな事業を展開しました。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ 熱・中・時・間

～深谷オープンガーデン花仲間～

嶋村靖子代表

心の花を咲かせよう！

4月29日・30日の2日間、深谷オープンガーデン花仲間（以下「花仲間」）が、東日本大震災復興イベントとして「第9回オープンガーデンフェスタ」を開催。会員73軒のお庭が無料公開されました。

今年は大震災の影響から開催が危ぶまれましたが、会員の中から「花でみんなの心を癒やし、復興支援しよう」、「花を通して心を届ける行動を」と意見が上がり、庭に義援金箱を設置することとなりました。会員が丹精込めて育てた花々が見ごろを迎え、各庭には被災地の福島など全国からの来場者があり、大変なにぎわいでした。

代表の嶋村さんは「花や緑には、人の心をつなげる不思議な魅力がある。交流の輪がどんどん広がることがうれしい」と話されていました。

花仲間は、平成16年に「ガーデンシティふかや構想」を掲げた市の呼び掛けにより23軒から発足し、「まちを花でいっぱいにしたい」との願いを胸に、花仲間会員が地域のガーデンリーダーとして活躍。現在は会員90軒を数えます。

その活動は市内各所を、花や緑で彩り、市民の目を和ませてくれています。平成18年には国土交通大臣から、憩いの場をつくる活動が評価され、「第16回全国花のまちづくりコンクール大賞」を授与されました。

「わたしたち花仲間は、オープンガーデンだけでなく、ボランティア活動を通し、『これぞ深谷ガーデン』というものを形作り、花や緑であふれるきれいなまちにするため、協力していきたい」と目を輝かせていました。

▲お庭の手入れをする深谷オープンガーデン花仲間の皆さん（緑の王国にて）

ありがとうの手紙

最優秀賞
一般の部
拝啓　父ちゃんへ

新戒　荻野　裕子さん

早いものでもう一年･･･。新盆になりました。仕事を辞めたら、毎日会いに来ると約束したのに、一人で寂しく逝ってしまいました。

入院中は「大丈夫だ、ありがとう。」と固く握手をし、その手の温もりと「ありがとう。」の言葉をお土産に帰路についたものです。

「父ちゃん、そっちの暮らしはどうだい？母ちゃんには会えたかい？こっちは元気でやってるよ。」

新しい提灯を持って盆迎えに行きます。二十二年ぶりに二人寄り添って、会いに来て下さい。

夫婦道のススメ

「一緒にいられるだけで」

新井恒吉さん（87歳）
みよさん（87歳）

境にお住まいの新井さんご夫妻は、結婚66年目。毎日一緒に畑で汗を流すというお二人が結婚したのは、第2次世界大戦のさなか。既に軍隊への招集が掛かっていた恒吉さんの熱い思いを、みよさんが受け止めました。結婚して3か月で離れ離れになってしまったお二人ですが、だからこそ、今は一緒にいられるだけで幸せだと言います。

夫婦円満の秘訣は、相手の気持ちを信じ、お互いに安心感を与えることだそうです。